
桜月華祿

story00963

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜月華祿

【Nコード】

N0013BA

【作者名】

story00963

【あらすじ】

この小説は銀魂と薄桜鬼のコラボ作品です。
万事屋メンバー達と共に過ごしている少女「紫苑」。
彼女はある日、異世界に飛ばされる。
その世界で待っていたものは……

第零話〜人物紹介〜

この話に出てくるオリキャラの説明です。

名前 紫苑

性別 女

年齢 『言つかボケ!!』

種族 桜月華^{おつつきか}

服装 ・紫の目と髪

・髪は低めの位置で一つに結っている
・着物は薄い紫色で、所々に花の模様がある（そして、かなり着崩している）

・着物は左側の袖がない。そして、裾は彼女の足元までであるが、動きやすいを重視した着方なのでいつも右脚が見えている

性格 ・明るい

- ・面倒くさがり屋
- ・戦うのはあまり好きではない
- ・どちらかと言えばSかな？

その他 ・鉄扇と小刀を一对ずつ隠し持っていて、刀をいつも手に持っている（時々腰にさしている時もある）

- ・昔、銀時達と一緒に攘夷戦争に参加していた

- ・ 剣の腕は銀時とほぼ互角（銀時の方が少し勝る）
- ・ 真選組でバイトしている（よく総悟と一緒に土方を襲いに行く）

- ・ 夜兔と似た『桜月華』一族の生き残り

『桜月華』の説明です。

『桜月華』

最強傭兵一族『夜兔』と並ぶ実力の一族

しかし、十年ほど前に絶滅した

紫苑は桜月華一族唯一の生き残り

桜月華は戦闘能力は高いが、治癒力はそれほど高くない
見た目は人と同じで、夜兔とは違って陽の光も問題なく、肌の色も
人それぞれ

唯一の見分け方は、戦闘時に変化する銀の髪と紅い目
この状態になると、戦闘能力が普段の倍になる

そして、紫苑も神楽と同じ様に、一族の血を押さえ込んでいる
紫苑の場合は、夜兔の様に血に狂う事はないが、桜月華の血に身を
委ねて戦うと夜兔以上の力を出すことができる
ただし、その代償として己の『寿命』を削る

第零話 〽 人物紹介 〽 (後書き)

これからよろしくお願いします!!

第一話〜始まり〜

┆紫苑 side┆

『銀時、起きて』

銀「んー……あと十分……」

ゴキッ

銀「ギイヤアアアアアアアツ!!!!」

『おはよう、銀時』

銀「紫苑ちゃん!?朝からひどくない!?」
私は朝、銀時を起こすために腹を思い切り踏んだ
そしたら、見事に起きてくれました

銀「で、一体何?」

『ちょっと早いけど、真選組に行ってくるね』

銀「早すぎだろっ！！今、朝の4時だぞ！！」

『今日、総悟と一緒に土方を暗殺しに行くんだよ……昨日言われてたから、今起こして伝えようと思ってさ』

銀「よし、紫苑ちゃんにはこれをあげよう」

銀時は冷蔵庫からマヨネーズを出してきた

『銀時、これは私に対しての嫌がらせか？』

銀「違えよ……このマヨ、よく見てみる」

銀時がマヨのパッケージを見せてきた

『マヨ、カスタード？』

銀「そう！これは銀さん秘蔵のカスタードだ！！」

『んで、これをどうしろと？』

銀「使い道は総一郎君と相談するといい」

『ふーん……ま、行ってくるよ』

私は銀時から貰った物を懐に入れ、真選組に向かった

『総悟、いるー？』

しばらくすると、襖が開いた

沖「紫苑ですかイ。どうしやす？早速行きやすか？」

『その前に、これ』

私はさつき銀時に貰った物を総悟に渡す

沖「……………(ニヤッ)」

あーあ

真っ黒だよ

本気と書いてマジで真っ黒な笑みだよ

沖「じゃ・・・行きますか（黒）」

『ラジャー！』

土方自室前

沖「じゃ、もう一度おさらいしやす」

今回の作戦はこうだ

1 襖を開ける

2 バズーカー & amp ; マヨカスタードを構える

3 発射！！

以上だ

『よし、開けるよ』

私は音をたてないように襖をゆっくりと開ける

その先には、土方が寝ていた

ま、当たり前か

そして、私と総悟は武器を構える

二人『「おはようございませーす!」!」』

土「ギイヤアアアアアアアツ!」!」

本日二度目の叫び声

そして、土方のこの叫び声で、真選組の一日が始まった

『巡察つてさ、メンドイよね』

土「文句言つな」

『しかも今日は私が心の底から望んでいなかったニコチン野郎との巡察だし・・・チツ』

土「今舌打ちしたか、おいしいいつ!」?

『うつせーよマヨ。おまえの存在が私をイライラさせるんだよ』

土「それはこっちの台詞じゃボケエ!朝っぱらからバズーカー撃ちやがって・・・直撃したらどうするつもりだ!」?

『心の底から喜びます』

土「てめっ！・・・何だ？」

マヨがいきなり止まったので私はマヨの足を蹴ってこかす
・・・ぷっ！

綺麗に顔面強打したWWW

『あ？何の騒ぎだ？』

マヨをこかせ、少しスッキリしていると、少し離れた所が騒がしかった

『マヨ、あれ何の騒ぎ？』

土「誰がマヨだ！マヨネーズを馬鹿にするなあ！！」

『はいはい。で、あれは何だマヨ方君』

土「知るか。ただ、少し様子見だな」

『じゃ、私はあっちに行つてきまーす！！』

土「好きにしる」

私はマヨから許可をもらい、騒がしい方へと向かっていった

「キヤアアアアアアツ!!」

『は……叫び声!?!』

今のはヤバそうな声……

私は声が聞こえた方へと走った
すると、たくさんの方が私の方へ恐怖でおびえた顔で走っていった

「ば、化け物つ!!」

「あんなの、人じゃねえよ!!」

「し、死にたくない!!」

すれ違う度、そんな声が聞こえた

私は何度も”化け物”と言いながら走ってくる人とすれ違う度、まるで自分に言われているようで耳を塞ぎたかった

『はぁ……この辺り、かな?』

辺りを見渡すが特に怪しいところはない

歩みを進めると、私の一番嫌いな”血”の匂いがした

『うつ……』

血特有の鉄臭い匂いに耐えながら先へ進むと、白髪の男がいた
そして、その男は人の血を啜っていた

『っ！！』

私は手に持っていた刀を構え、白髪の男に近づくと、男は私の方に振り向き、刀を振りかざした

「ヒヒヒヒッ……血を、血をくれ！！」

理性を失った紅い目に、一瞬怯んでしまった

『お兄さん……悪いけど、私はお兄さんを殺さなきゃ』

「血……血だあ！！」

男は叫んだ後、私に斬りかかってくる

私はその一撃を避け、男の背に回り肩から一気に斬った

『……悪く思わないですよ。これでも一応仕事なんで』

普通ならそれだけで終わっていた

だが、男は立ち上がり、また斬りかかってきた

『はっ！？一体どんな体してんだよ！！』

先ほどと同じ様に背に回り、私が斬った所を見た

斬ったはずの傷はなく、綺麗に塞がっていた

『こいつ、天人か！？』

男は一気に私との距離を詰め、刀で心臓を狙って突いてきた間一髪で避けたが、少し腕をかすり、うっすら血が出てきた

「血・・・血をよこせ！！」

腕から滴る血を見て、男は叫びながら斬りかかってきた私はその姿が血に狂った自分の姿と重なり

男の心臓に刀を突き刺した

「うぐっ、グアアアアッ！！」

そして、今度は男が立ち上がることはなかった

『はあ、はあ・・・今度こそ、終わった？』

終わったと思うと急に力が抜け、その場に座り込んだ

『そろそろ、土方が、来る頃かな・・・』

意識が薄れる前に私は”寝たら皆に会えなくなる”という違和感があつた

だが眠気に負け、私は意識を手放してしまった

私が目を覚ましたとき、回りは真っ暗だった

『えっ・・・夜!?!?』

何度見ても辺りは真っ暗で、唯一の光は月の光だけだ

『あつ、刀!?!』

私はさつきまで何をしてたのか思いだし、大事な刀を探した刀はすぐそばにあり、懐に隠し持っている鉄扇と小刀もあった

『とりあえず、何かあったら戦うことはできる・・・』

私は刀を手に持ち、ここがどこなのか知るために、人を探して歩き始めた

裏道から大きな所に出ると歌舞伎町と違って、人がなく静かだった

『夜つて言っても静かすぎない？それに、ターミナルの光がないし・
・』

ターミナルがない!!!!!!!!

空を見上げてみると、どこにいても目に入ってきたターミナルや、
宙にいつも浮いている船がなかった

『おいおい……マジでどこだよ……』

ガタッ

『物音……人かな?』

私は人がいると思って、音がした方に行った
だが、行かない方が正解だったのだ・・・
大きな通りからまた裏道に入っていくと、人の会話が微かに聞こえた
人がいる方へ近づいていくと、昼間と同じ”狂気”を感じた
歩みを止め、しばらく耳を澄ましていると、先ほどの声の主たちの
叫び声が聞こえた

『また・・・お前等か・・・』

叫び声が聞こえた所に行くと、昼間と同じ光景が広がっていた

私は血に狂っている三人の男の一人に近づき、刀で心臓を突き刺した

『せめて、血に狂う同士で殺してあげるよ』

「血・・・血だあ！！！！」

二人は同時に斬りかかってくる

一人は喉を斬り裂き、そのままもう一人の心臓めがけて突き刺した
刺された方は動かなくなったが、もう一人はすぐに襲いかかってき
たので、先ほどと同じ様に心臓に刀を突き刺した

『血に狂った者に、光はない・・・か』

刀に付いた血を振り払い、顔に付いた血を拭い取る
さすがに三人も殺すと返り血で服などが汚れた

『隊服、来てて良かった・・・』

今回は運良く隊服を上だけ着てたから着物に血が付くことはなかった

血の匂いで頭痛がしてきたから場所を移そうとすると、背後に人の
気配を感じ、一瞬で刀を抜き、気配の方へ向けた

『あんた等、乙女を背後から襲う趣味でもあるんですか？』

剣先には白いマフラーを巻いた男と茶髪の男がいた
茶髪の方は何故か笑っている

カキンッ

そして、刀同士がぶつかる特有の音が響いた

『そんなに殺気を出されたら気が付きますって』

刀を二人に向けたまま、もう一人の刀を小刀で防いでいる
・・・戦闘狂か？

歳「てめえ・・・一体何者だ？」

『それを知りたいのなら、まずは刀をどけてくれませんか？』

そう言つと、男はすんなりと刀をしまった

良く見ると、こいつ等めっちゃイケメンじゃね？

『んで、私に何か用ですか？』

総「それ・・・君が斬つたの？」

それ？

ああ、血に狂ってた奴等のことか

『そうだけど・・・何、あんた等のお友達だった？だったらゴメンね〜これ、正当防衛なんで』

総「別に、お友達じゃないから気にすることないよ」

歳「本当に、お前が斬ったんだな？」

『さつきからそう言ってるでしょ？耳悪いの？』

歳「てめっ！！」

すると、何故か茶髪の人が笑いだした

その隣にいるマフラーさんは少し嫌そうな顔をした

斎「副長。これ以上の長居は危険かと・・・」

歳「そうだな・・・おいお前！」

『私、”お前”って名前じゃないんですけど・・・ま、名乗るつもりもないけどねw』

総「悪いけど、一緒に来てもらおうよっ」

痛い

腕、めっちゃ痛い

なんか茶髪の人から黒いオーラが見えるよ・・・
というか、何か総悟に似てる様な・・・

総「何ぶつぶつ言ってるの？」

『それはきつと気のせいです』

総「ふーん・・・ま、別にいいけど」

歳「総司、早く連れて行け」

総「分かってますよ、”土方さん”」

ん！？

土方あ！？

このロン毛のイケメンがあ！？

歳「何だ、俺の顔に何か付いてんのか？」

私・・・今とんでもない所にいるのかも

総「じゃ、行くよ」

私の手を縄で縛り終え、私はある”屯所”に連れて行かれた

『あの、一つ聞いてもいいですか？』

総「ん、何？」

『あの黒髪の人、いつもあんな顔してるんですか？あれじゃ、将来早いうちにハゲますよ……』

総「あはははっ！！君、おもしろいね！」

『ん？私は思ったことをそのまま言っただけですけど……』

総「それがいいんだよ」

歳「総司！早く連れて行けっ！！！！！！」

『あ……おはようございます、マヨ方さん』

歳「まよ？俺は土方だ」

『で、土方さん。これは一体なんですか？何であなたが寝ている乙女の部屋にいるんですか？』

歳「今、お前について幹部共と話してる。お前も来い」

『強制ですね……ま、別にいいですけど』

両手を縛られたまま立ち上がり、マヨ方じゃなくて土方さんの後を付いて行った

歳「ここだ、入れ」

そう言つて、先に入っていく土方さんを私はいつもの癖でこかした私の足にひっかかって、綺麗に転けてくれました

総「ぷ、あはははははっ！！土方さん、綺麗に転びましたね！！」

中にいた男の人達は、目を大きく開け、こけた土方さんを見ていた

歳「てめえ……どういうつもりだあ？」

『いや、何となくむかついたんで』

歳「てめえな!!」

?「まあ、トシ！落ち着きなさい!!君も、ね？」

歳「チツ」

舌打ちをしながら、土方さんは自分の席に行き、座った

『はあ・・・私はどこに座ったらいいんですか?』

?「ああ、そこに座ってくれたまえ」

お父さんの感じがする人が指した場所に、私は座った

幹部?らしき人達に囲まれていて、何か嫌だな・・・

特に、視線が

?「お、自己紹介がまだだったな!俺は新選組局長の近藤勇だ!こ
つちのトシが「近藤さん!!」ん?何だ、トシ?」

歳「あのなあ・・・前にも言ったが、何で俺達の事を教える必要があるんだよ」

『あの、話があるなら早くしてくれませんか?私、待つの嫌いなんで』

勇「これはすまない。トシ、後は任せたぞ」

そして、私をどうするかについての話し合いが再開した
ま、私はほとんど話を聞いていないけどね
ポーツとしながら、幹部達を見ていた

総「どうします？やっぱ斬っちゃいます？」

勇「総司！女子に向かってそんな物騒なことを言っんじゃない！！」

？「失礼します。お茶をお持ちしました」

ズキユーーーーーンッ！！

『何この子！可愛いー！！』

？「えっ！？」

『お名前は？』

？「ゆ、雪村千鶴です」

『千鶴ちゃんね！今日から千鶴ちゃん、私の妹になってくれない？』

千「えっ・・・私なんかで、よければ／＼」

ああ、可愛い・・・

天使だねこの子は

歳「おい・・・もういいか？」

『すごい眉間のしわ・・・将来マジでハゲるね、あれは』

総「あははははははっ！”はげる”だそうですよ、土方さん？」

歳「少しは黙りやがれ！！！」

『だから、そんなに叫ぶとハゲるってば』

歳「てめえ・・・いい加減にしるよ・・・今どういう状況か分かってんのか？」

『だから、要は私を殺すか殺さないかの話でしょ？さっさと決めて下さいよ』

？「お前・・・本当に”女”なのか？」

おい、今失礼なことをサラリと言ったのは何処のどいつだ？
周りを見渡すと、髪の毛の長い少年が目に入った

？「左之さんはどう思うよ？・・・って、いだだだだだっ！！！！
！」

『おう少年よ・・・私はどう見ても女だろ？』

私は少年の髪の毛を思い切り引っ張る

少年の隣にいた筋肉さんと赤毛の方は呆然とこの光景を見ている

歳「だから・・・少し黙りやがれ！！！！！！！！」

少年、土方さんに救われたな

『で、結論は？』

元の席に戻りながら土方さんに尋ねた

歳「悪いが、お前を生かしておく理由が俺達にはない」

『そうですね』

総「あれ、驚かないんだね？」

『半分くらい予想できてたんで・・・特に何も思いませぬ』

歳「斉藤、こいつを元の部屋に連れて行け」

一「御意」

マフラーさんこと斉藤さんは私を元の部屋に案内していった部屋に着いてから斉藤さんが喋った（ここ重要だよ？）

一「・・・最悪の結末を考えておけ」

『あれ？今は殺さないんだ』

一「まだ局長の許可が無いからな・・・それに、一人見せられない奴もいるんでな」

『ああ・・・千鶴ちゃんね』

そして斉藤さんはそのまま部屋を出ていった

殺されちゃうんだ、私

でも、私もここで死ぬわけにはいかないんだよね

武器は鉄扇二つと小刀一つ・・・

あの人数相手にこれは少ししんどいかな？

・・・最悪、一族の血に頼ることになるね
どうしよう・・・

”まだ局長の許可が無いからな”

まだ少しは時間がある

はつきり言って眠いし、寝ようかな？

殺される身だけど・・・

寝ようと決めるとすぐに睡魔が襲った

私はそのまま意識を手放した

―千鶴side―

決まっちゃった

本当に決まっちゃった

” 決行するのは本日の亥の刻 ”

土方さん達・・・本当に殺してしまうのだろうか

唯一、部屋に行って話をしてきて良いと言われたときは驚いた

千「あの、すみません」

彼女のいる部屋の前

襖を開ける前に思った

私、この人の名前も知らないんだな・・・

千「あの、千鶴です。開けますよ？」

返事がなかったから私は襖を開けた

その先で、彼女は寝ていた

千「殺されるかもしれないのに・・・なんで、こんな風に眠る事ができるんだろう」

『別に。ただ、あの人はせこい真似をして殺さないだろうなって思っただけだよ?』

千「お、起きていたんですか!？」

『千鶴ちゃんの独り言で目が覚めた』

千「そうですか・・・」

『紫苑』

千「え?」

『私の名前は紫苑。改めてよろしく、千鶴ちゃん』

千「はい!紫苑さん!!」

『やっぱり可愛いー!!』

紫苑さんに抱きつかれて思った

「生きてほしいーと・・・」

『千鶴？』

千「は、はい！何ですか？」

『ありがとう、心配してくれて』

千「あの、紫苑さん！新選組の方々は・・・本当に良い方達なんです！だから・・・」

『別に嫌いになんてならないし、まず死なないよ？』

千「でも・・・」

『千鶴・・・私の後ろに来てくれないかな？』

急に紫苑さんの声色が変わった
さつきと違って、威圧感のある声

私は紫苑さんの背中をただ見ているだけだった

「紫苑 side 1」

千鶴ちゃんと話している頃、空は赤い夕焼けの光に包まれていた
だんだんと近づいてくる”死”を感じながら

千鶴の顔も、先ほどと違って暗かった

まあ、あんな事言われたらそうなるかな
たぶん……

『紫苑』

千「え？」

『私の名前は紫苑。改めてよろしく、千鶴ちゃん』

千「はい！紫苑さん！！」

せめて、この子には言っておきたかったんだよね……私の名前を

またそれから話していると嫌な気配を感じた

まだ確信がなかったから千鶴には心配させないようにしていた
でもそれは私の気のせいじゃなくて、本物だった

そう確信した時、千鶴を私の後ろに避難させた

ここに来てから何度も感じた、狂っていて、歪んでいる気配

ブチッ

千「え……引きちぎった？」

『まあね・・・さすがの私でも、あいつ等に殺されるのは一番嫌だからね』

私がそう言った後、襖が乱暴に開けられた

そして、その先には白髪で紅い目をしている狂った人達がいたしかも、かなりの数が

『おいおい・・・千鶴に見せたくないって言うのは嘘か!？』

千「きゃ・・・この人達は・・・!!」

『千鶴ちゃん、絶対に私から離れちゃだめだよ・・・いいね?』

千鶴ちゃんはコクリと頷いた

私はそれを見てから、隠し持っていた鉄扇を取り出した

両手に持ち、構える

『行くぞっ!!』

畳を蹴り、目の前にいる敵の喉を狙って突っ込んだ

部屋の入り口にいた奴等を一緒に庭へ吹き飛ばした

さっき喉を斬った奴は、傷が深く、立ち上がることはなかった

改めて見ると、こいつ等は10から20ぐらいの数だった

刀がない今、この数を相手するのはかなりしんどい

千「あの！私、土方さん達を呼んできますー！！」

『千鶴！少し待てー！！』

千鶴は部屋から出ていて、そのすぐそばに一人敵がいた

千「きゃーー！！」

間に合え！

間に合え間に合え間に合えー！！

ザシュッ

『い、行くなら早く行ってくれ・・・そう長い間は、無理だよっ』

千「紫苑さん！なんでかばったんですかー！！」

『女の子に、怪我させるわけには、いかないでしょ?』

千鶴をかばい、斬られた背中が痛む

だけど、今は千鶴を逃がすことが優先だから、頑張らないとね

『千鶴、早く!!--』

千「絶対に戻ってきますから!!だから、死なないでくださいよ!
」!

そう言っつて、千鶴は走っていった

『ふっ……死なないよ、私は』

すぐ後ろにいた敵の心臓を刺し、私は”桜月華”の血を覚醒させた

『お前等……生きられると思うなよ』

第三話〜化ケ物〜（前書き）

今回はかなりシリアスです。

第三話く化ケ物く

┆紫苑 s i d e ┆

私は普段抑えている”桜月華”の血を少し覚醒させた
その証拠に、髪は紫から銀、目は紅に変わっている

『これ、こいつ等と見た目がほとんど変わらないよね』

「血だぁー！ーっ！！」

叫びながら迫ってくる敵を、今度は小刀に持ち変えて、斬った
今はさつきよりも戦闘能力が高い状態だから、敵の傷もかなり深い
数もあと半分ぐらいになり、少し余裕ができた

一方敵の方は、斬られた仲間？の血を啜り、足りなくなったらまた
私に襲いかかってくる

はつきり言っつて、もはや”人”と呼べる状態ではない

『・・・この姿を見たら、あいつ等は・・・千鶴は、引くんだらう
な』

小刀を握る力を強め、残りを斬るために、再び地面を蹴った

― 総司 side ー

さつきから何かがおかしい

ここにいる皆もそれに気づいていた

けど、まだ誰も確かめに行こうとしなかった

話し合いもほぼ終わったし、僕が立ち上がるうとするところの部屋の
襖が勢いよく開けられた

千「みなさん、大変なんです!!」

襖の先には、肩で息をしている千鶴ちゃんがいた

総「どうしたの? そんなに慌ててさ・・・まさか、あの子が逃げた
とか?」

千「違います! 前、私が襲われたあの人達が、紫苑さんを襲いに来
たんです!!」

歳「何!?!」

千「それに、紫苑さん・・・私をかばって怪我もしているんです!

！鉄扇だけで倒せる相手じゃないんです！！」

総「土方さん、先に行つてきますね」

僕は返事を聞く前に、部屋を飛び出した

―歳三side―

鉄扇だけで”あいつ等”と斬り合つてる！？

あいつは死にたいのか！？

歳「お前等、総司の後を追え！いいか、絶対にあいつを殺すなよ！」

俺と千鶴以外は総司の後を追ひ、部屋から出ていった

歳「どのくらい数がいた？」

千「えつと・・・10から20ぐらいです！！」

歳「なんだって！？俺もすぐに行く。近藤さん！こいつを頼んだぜ！！！」

勇「任せておけ!！」

俺は近藤さんに千鶴を任せした後、あいつの部屋の方へ向かった

┆紫苑 side┆

数はあと5・6ぐらいまで減らすことが出来た
さすがにしんどいし、血の匂いでかなり頭が痛い

『チツ!待ったは無しかよ!!!』

残り全部が突っ込んできたので、小刀を横に一閃
一度距離を取ってから、個別で斬りかかった
心臓を刺し、刀を抜くまでの数秒の間、片方の手に持っている鉄扇
で相手の喉や腹を斬る

バタバタバタッ

背後から人の足音が近づいてくる

きつと千鶴が呼んだのだらうと思いい、敵を気にしながら足音のする
方を向いた

『後少しなんだっ！私は、負けねえ！！！！』

小刀でもう一人突き刺し、残り三人になった

人の気配が増えてきた事を感じながら、残り三人の喉を斬り裂き、戦いは終わった

総「ねえ・・・これ本当に君が全部斬ったんだよね？」

？「おい、あいつの髪と目！！！」

？「あいつも”羅刹”なのか！？」

？「じゃ・・・やっぱし・・・」

歳「斬るしか、ねえだろうな」

皆の目は冷たかった

その目は、私が嫌というほど見てきた”化け物”を見る目だった

『斬るしか、ない・・・』

歳「ああ」

土方が肯定を示すと、周りの幹部達はそれぞれ刀を構えた
そして、一斉に私に向かって駆けだした

『あなた等も、私を”化け物”として殺すんだな』

この声が届いたかどうかは分からない
ただ、言い切ったと同時に、いくつもの刃が腹部を突き抜けた

『がはっ！！』

たくさん血を吐いた

刃はそのまま引き抜かれ、そこから血が溢れ出す

千「紫苑さんっ！！！！！！」

意識が無くなる前、千鶴が私を呼ぶ声が聞こえた様な気がした・・・

第四話〜桜月華一族〜（前書き）

台詞が多いです。

すみません・・・

第四話　桜月華一族

―紫苑 side―

真っ暗だ

真っ暗で何も見えない・・・

私は死んだ

”人”としてではなく、”化け物”として死んだ

本当、何でこんな世界に来ちゃったんだよ・・・
もう、銀時にも会えないのか？

新八や神楽、定春にお登勢さん・・・近藤さんに土方さん、
山崎・・・ツラにエリザベス、他にもたくさん・・・

こんな別れは嫌だな

だって、まだまだいっぱい話したかったから・・・

『本当、何であんな世界に行っちゃったんだろう・・・』

あの世界で死んでも、きっと私は元の世界には帰れない
・・・最悪だ

これからどうなるんだろ・・・
全く見当つかないわ・・・

せめて、死んだなら先生に会いたいな・・・

私は、薄れゆく意識を手放していった

痛っ・・・

鋭い痛みで、私は目覚めた

『は・・・うう、何処？』

周囲を見渡そうとするが、腹部の痛みでまともに動けなかった
唯一動くのは首から上と両腕だけ

『んー・・・何がどうなっている』

千「紫苑さん、入りますね」

襖の方から、微かに女の子の声が聞こえた
襖が開けられ、声の主の姿が見えた

『ち・・・千鶴？』

千「っ！！紫苑さん！！！！」

千鶴は私の顔を見ると涙を流しながら私の名前を呼んだ

千「よかった・・・本当に、よかった!!」

『千鶴・・・』

私は千鶴が泣き止むのを背中をさすりながら待った

『落ち着いた?』

千「すみません・・・傷口にひびきましたよね?」

『大丈夫だよ!・・・たぶん』

千「あの、紫苑さんが目を覚ましたら教えてくれと・・・土方さん達が」

『一人にしないで』

千「えっ？」

『千鶴も一緒にいてほしい・・・あの人達だけは、嫌だ・・・』

千鶴は私にそっと微笑んでくれた

その笑みで、私は少しだけど、心から癒された

千「もちろん私もいますよ！だから、待っていて下さいね」

そう言つて、千鶴は部屋から出ていった

一人千鶴達を待つ時間が、とても長く感じた

永遠に近いような待ち時間の間、私は今までの事を思い出した
なぜ、私がここで寝ていたのか
なぜ、腹部が痛いのか
なぜ、一人になると怖いのか・・・

千「紫苑さん、入りますね」

『はい・・・どうぞ・・・』

私が起きているのを知っているから、今度は私の返事を聞いてから襖は開かれた

歳「・・・入るぞ」

土方さんの後に続いて、幹部達が部屋に入ってきた

私は、誰の顔も見ることには出来なかった

ただ、寝たきりなのはさすがに失礼だと思い、腹部の痛みには耐えながら起きあがった

歳「おい、無茶するんじゃないよ！」

『だい、じょうぶ・・・です』

私が起きあがったことに驚いたのか知らないが、幹部達の顔は驚き

を隠せていなかった

あのいつも表情を変えることのない斉藤さんでさえも・・・

『で、こんな”化け物”に・・・一体何の用ですか？』

全『すまなかった』

『・・・は？』

歳「お前を殺すつもりはなかったんだよ」

土方が苦虫を潰したかの様な顔で話し始める

歳「今回、あんな事をしたのは俺達の都合のせいだ・・・本当に、

すまなかつた」

『・・・頭、上げてくれませんか？』

土方はゆっくりと頭を上げ、私の目を見る

『あなたが頭を下げるとか、滅多にないから気持ち悪いですよ？』

歳「だが・・・」

『ま、きつと何か理由があるんですよね？だったら、それを教えてくださいませんか？もちろん、私のことについても話しますから・・・』

総「君も、何かを抱えているんだね・・・」

『まあ、それはお互い様でしょ？』

そして、土方さんは”羅刹”と”変若水”について話し始めた

新選組の秘密

私が聞いた”羅刹”と”変若水”の話は、幹部達しか知らない秘密の話だった

さすがにこの話は千鶴には聞かせるわけにはいけないので、この場に千鶴・近藤さん・山南さんは退出した

歳「まあ、こんな所だ。何か分からねえ所とかあったか？」

『大丈夫です』

総「この話を聞いた以上、新選組から離れることは出来ないよ？」

『そんな事、承知しています』

まさか、こんな世界にあんな化け物を作る技術があるとは思っていなかった

歳「なら、今度はお前のことについて聞かせてもらおうか」

『まず、私はこの世界の住人ではありません・・・簡単に言うと、異世界から来ました』

永「異世界だと？」

原「証拠はあるのか？」

『無いです。信じてもらうしかありません』

歳「・・・続ける」

『まず、二ことの違いは”天人”がいない所です』

平「あ、あまんと？」

『一言で言えば人間ではありません。で、私も天人の一人です』

私はそのまま淡々と一族の話をする

『私は”桜月華”という、最強傭兵一族の生き残りです。見た目は人と変わりませんが、人間離れした力と、銀髪の紅い目が唯一の特徴です』

歳「羅刹みたいに、血に狂う事はないのか？」

『基本的に血に狂うことはありません』

私のこの言葉を聞いて、幹部達の雰囲気少し緩まる

総「じゃあ・・・傷口の治りとかは早いのか？」

『みなさんが作った刺し傷・・・治ったか見てみますか？』

向こうの返事を聞かずに、包帯で巻かれている腹部を幹部達に見せた包帯には、血がつつすら付いているのが見える

『分かりました？』

総「うん。治療力は羅刹ほどないんだね」

『まあ・・・私の一族については、こんな感じかな?』

歳「ああ、問題ない」

平「で、土方さん。こいつどうすんの?」

『“こいつ”じゃねえよ、くそガキ・・・髪の毛ひっこ抜くぞ?』

平「いだだだだだっ!!悪かったって!!てか、俺名前知らないし
!!!」

総「紫苑ちゃんだよな?」

—「紫苑、で合っているか?」

歳「紫苑だろ?」

原「紫苑だよな?」

平・永「何で知ってんの！？/知ってるんだよ!？」

総「千鶴ちゃんが言ってたでしょ？まさか、聞いてなかったの？」

ロン毛の少年と筋肉さんは二人部屋の角で湿った空間を作り出している

『あの・・・ロン毛君と筋肉さん!そんなじめつとした空気を作らないでもらえます?』

平「ロン毛じゃなくて平助え!!!!!!!!!!」

永「筋肉じゃなくて新八い!!!!!!!!!!」

総「あはははははっ!!--やっぱ、君おもしろいね!!--」

『そ、そうなのか?』

総「折角だし、この際自己紹介でもしておこうか！いいですよね、土方さん？」

歳「なら、近藤さん達を呼んでこい。さすがに、こいつを移動させるわけにはいかねえしな」

一「なら、俺が呼んできます」

勇「もういいのか、トシ？」

歳「ああ。それより、平助と新八がこいつの名前も知らないんでな、この際だから自己紹介でもしようと思っただけ」

総「君、ここにいるほとんどが誰なのか知らないでしょ？」

『そつえばそつですね』

勇「なら、早速始めよう！」

第四話 桜月華一族 (後書き)

シリアスはしばらくしないかな？

次回からは銀魂らしくギャグでいきます

・・・たぶん

第五話、自己紹介、始めるよ（前書き）

今回も台詞がほとんどです・・・

第五話〜自己紹介、始めるよ〜

┆紫苑 side┆

『じゃ〜第一回、自己紹介・・・始めるよー!』』

歳「こいつ、怪我人じゃなかったか？」

『土方さん・・・』

『気にしたら負けです』

『うるさい鬼副長も静かになったので……まずは近藤さん！お願いします！』』

勇「改めて、新選組局長の近藤勇だ！よろしく……えつと？」

『あつ！まず私の名前ですよね！申し遅れました、紫苑と言います。よろしく！』』

勇「紫苑君か！……失礼かもしれないが、名字は？」

『あー……私の一族は名字が無いんですよ！ちゃんと親もいるんで、気にしないで下さいね！』』

勇「そうか！では改めて……紫苑君、これからよろしく頼む！」

『はい！』

勇「次は……山南君。いいかな？」

山「ええ、副長はまだ目が覚めていないようですから……」

山南さんの一言で皆の目は土方さんの方へ移る
気絶させた張本人の私は山南さんを向いたまま

山「初めまして、山南敬助と申します。これから、よろしく願いますね」

『しつ丁寧にどうも……私の方こそ、これからお世話になります』』

平「あいつ、ちゃんとした言葉遣い出来るんだ……意外」

『君は確か……ポチだったかな？（黒）』

平「いだだだだだっ！！髪！髪を引つ張るな！！あと俺は平助え
！！！！」

『いや、お前はポチだ。これ絶対だから』

平「いやだから、俺は藤堂平助！犬じゃねえから！！」

『あれ？私”犬”なんて言葉、一言も言っていないよ？』

平「……左之さん。俺はもう無理だ……」

左「まあ、平助にしちゃ上出来だ」

「次は誰ですか？」

永「俺だ!!」

「おお、筋肉さん!!」

永「二番組組長、永倉新八だ!よろしくな!!」

私の声で、一瞬静かになる

永「し、新八がどうかしたか？」

「いや、知り合いに”メガネ新八”って奴がいるんだけど・・・同じ新八でもここまで違うのか・・・」

永「えっと、もういいのか？」

「はい」

左「じゃ、次は俺だな」

『出た、エロイ人』

左「おいおい、勝手に決めつけんなよ……」

『だって……見た目と声からして、歩く18き「紫苑ちゃん」
ん?』

総「それ以上は言っちゃ駄目だよ?」

『あ、そうですね。ということで、続けて下さい』

左「……十番組組長の原田左之助だ。よろしくな?」

『こちらこそ』

楽しい?自己紹介も後三人(一人はまだ気絶中)

「……三番組組長、斉藤一だ」

『マフラーさん……可愛いっ!!』

私は思わず抱きついた

すると、斉藤さんの顔が真っ赤になった

「い、いきなり、何をするノノノ」

『いや、可愛かったんで……これは飛びつかないと!』

続きを言おうとすると、後ろに引き寄せられた

その時、私の腹を掴んだので少し・・・いやかなり痛かった

『痛っ！いきなり何で、す・・・か？』

総「紫苑ちゃん、抱きつくなら僕にしておかない？（黒）」

『よ、よろこんで・・・』

沖田さんの真つ黒なオーラに負け、私は沖田さんの上に座るといっ
体勢になってしまった

・・・沖田って、みんなあんなに黒いのか？

総「今、失礼なこと考えなかった？」

『ソナナ、トンデモアリマセン』

総「変な喋り方が気になるけど、まあいいや。一番組組長の沖田総
司だよ。よろしくね、紫苑ちゃん」

『あ、はい。よろしくお願ひします』

さて、残りは後一人！
鬼副長の土方さんは起きたかな？

『あ、おはようございます。よく眠れましたか？』

歳「ああ・・・お陰様、でな！！！！！！！」

『いきなり叫ばないで下さいよ。うるさいです』

歳「誰のせいだ？だ・れ・の！！！！」

総「土方さん。自己紹介まだなの土方さんだけですから、早くして
下さいよ」

歳「ちっ・・・副長の土方歳三だ」

『うげ・・・あのマヨとほとんど同じじゃん！まじないわぁ・・・』

歳「てめえ!!もういっぺん言ってみやがれ!!!!!!」

こっして、無事に自己紹介というイベントは幕を閉じた

平「どこが!?!」

第五話 自己紹介、始めるよ (後書き)

誤字・脱字などありましたら、教えてください。
お願いします。

第六話く生き抜いた証く（前書き）

やっぱり台詞が多い・・・
読みにくかったらすみません・・・

それでは、第六話です。

第六話く生き抜いた証く

―紫苑 side―

腹を突き刺されてから一週間経った

お陰様？で、傷はほとんど治った

まだ痛みはあるけどね・・・

ま、とりあえず！歩いたりするぐらいなら、何とかOKになりました。

あれ・・・作文？

―「入るぞ？」

『はい、どうぞー』

―「飯の時間だ。起きあがれるか？」

『・・・手を引っ張っていただけるとありがたい、です』

確かに、ほとんど治ったって言いましたよ？

けど、起きあがるのはまだ一人じゃしんどいです！！

『ありがとうございます』

―「気にするな／＼」

―「ちゃん、顔真っ赤w

やっぱ可愛いよお

—「おい、何も羽織らずに行くつもりか？」

『あ、忘れてた』

ちなみに、今の私は薄い着物を一枚着ているだけの状態（私の着物は返り血とか自分の血で着れる状態ではない）
部屋の角に、この前千鶴ちゃんが持ってきてくれた物をはおり、皆がいる所へ一君と一緒に向かった

—「遅くなりました」

『おはようございます』

部屋にはすでに全員揃っていて、土方さん・山南さんの二人だけいなかった

『あれ？山南さんは？』

総「今、土方さんと大阪に出張中だよ」

永「とにかく早く座れよ！俺の腹の高鳴りが聞こえねえのか!？」

『はいはい』

そう言いながら今日はどこに座ればいいのかのたろつと考えながら、自分の席を探す

原「今日は俺の隣だ」

『あ、どうも』

原田さんの隣に座り、朝の食事が始まった
そう・・・

これは戦争なのだ!!

永「隣の朝ご飯、突撃!!」

平「新八っさん！俺のばっか取るなよ!!」

原「どれ？このたくあんは俺が貰うぜ？」

平「左之さんまで!!」

ちなみに、席順は

私 原田 平助 新八

となっているため、ポチは両脇の二人におかずを取られていく

余談だが、千鶴ちゃんは羅刹について知らない
しかも監視対象だそうだ

今日も、本当ならば千鶴ちゃんは一人で朝ご飯を食べる予定だった
そうだ

だが、今は土方さんがいないから、皆と一緒に食べることになった

帰ってきたら、土方を一発殴る！

そして、私は一つ心の中で誓いを立てた

総「あ、そうだ！紫苑ちゃん」

『何ですか？』

総「後で紫苑ちゃんの刀を返すから、僕の部屋に来てくれる？」

『本当に！？』

総「うん。あと、怪我が治ったら新選組の隊士として働いてもらう
けど、いい？」

『はい！問題ありません！』

総「あと、ここは女子禁制だから男装して貰うことになるけど……
これもいい?」

『それは無理です!!』

原「無理って言われてもな……」

永「これは新選組のきまりだしなあ……」

『無理な理由ですか?それは、私が男装すると弱くなるからです』

総「どういう意味?」

『私の世界で、約二十年前に大きな戦争があつたんですよ。それで、
最初男装して、男として参加したら……斬られました』

着物を軽く脱ぎ、背中 of 傷を見せる

—「これは……」

永「男装したから、斬られたのか?」

『まあ、そうですね。私、厚着すればするほど弱くなるので……』

あと、着なれていないし……やっぱり、女物の着物の方がいいですね」

原「だけど、普通は男の服装の方が動きやすいはずだろ？」

『そんなの知りませんよ』

総「ねえ。最初、紫苑ちゃんすごく着崩してたよね？あれが、一番動きやすいの？」

『そうですね』

総「なら……今日、僕と一緒に着物を探しに行こうか？」

『いいんですか!?!』

—「総司。勝手にそんなことをしてもいいのか？」

総「実はね、土方さんに紫苑ちゃんの着物を探しに行ってくれって言われてるんだよね」

平「でもさ、本当に男装させなくてもいいのか？」

総「逆に、無理して男装させて……またあんな傷を作らせるなんて、僕は嫌だな」

原「俺も総司と同意見だな。ただ、どっかの組に入れる前に、隊士達の前でこいつの実力を見せる必要があるだろうな」

総「ま、紫苑ちゃんの実力は隊士達よりはるかに上だからね」

永「ま・・・隊務に支障はでないだろうから、文句も言えねえだろうな」

総「ま、紫苑ちゃんが隊の風紀を乱したりすることもたぶんないだろうね」

『えつと・・・?』

総「つまり、あの土方さんを納得させれば良いつて事」

『任せて下さい！絶対にあの人との口喧嘩は負けません!!』

総「ぷっ・・・あはははははっ！やつぱ、最高!!紫苑ちゃん、土方さんと話に行くときは僕も誘ってね？」

『いいですよ』

平「紫苑つてさ、勇気あるよな」

永「ああ。あの土方さんに喧嘩売りに行くもんな」

原「何か、総司が増えた感じだな」

― 沖田 side ―

総「はい。これで合ってるよね？」

『はい！ありがとうございます！！』

ここは僕の部屋

あの後、千鶴ちゃんの監視を一君に変わってもらって、僕は紫苑ちゃんと買い物に行くことになった

総「ねえ・・・ずっと思ってたんだけど、敬語じゃなくてもいいよ？何か堅苦しくてさ」

『うーん・・・』

総「僕のことを”総司”って呼ぶか、敬語をやめるか・・・どっちがいい？あ、両方でも良いよ？」

『け、敬語の方にしときます・・・』

総「遠慮しなくてもいいんだよ？」

『遠慮なんか、してま・・・してない！』

総「よくできました」

僕は紫苑ちゃんの頭を撫でてあげた

一君と同じ紫の髪・・・

触ってみたら、女の子らしい柔らかな髪だった

初めて会った時、この子はあの羅刹を三人も斬っていて、しかも僕たちの存在にも気づいていた

あの時から、この子の事が・・・紫苑ちゃんの事が気になった

着物はかなり着崩していて、肌の露出も多い

けど、全く違和感がなかった

『沖田さん？』

総「何？」

『いつ出かけますか？』

総「そうだね・・・特にする事もないから、今から行く」

『分かった』

総「千鶴ちゃんの部屋に一君がいるから、着物を借りておいで。さすがにそのまま外に出るわけにはいかないからね」

『あ、ホントだ・・・』

総「しばらくしたら紫苑ちゃんの部屋に行くから、大人しく待っててね」

『りょーかい』

そう言つて、紫苑ちゃんは部屋から出ていった
その時、朝見せてもらった傷を思い出した

右肩から腰まである、大きな傷跡

あの時、一人で何人もの羅刹を相手したあの日
僕はあの子を斬った
きつと、あの傷も彼女に傷跡として残るんだろうな・・・

” 『あんた等も、私を” 化け物” として殺すんだな』 ”

刀を刺される前、あの子が涙を流しながら呟いた言葉が忘れられない
あの後、千鶴ちゃんが目を覚ましたと言ったとき、僕は紫苑ちゃん
に会うのが怖かった
だって、僕達の勘違いであの子を殺しかけたんだから・・・

総「さて、そろそろいいかな？」

あの子の一族の話を聞いて、僕は誓ったんだ

紫苑ちゃんを二度と、誰にも”化け物”なんて呼ばせない

第六話 生き抜いた証 (後書き)

ずっと書いていませんでしたが、千鶴ちゃんは土方さんおちです。

夢主は・・・まだ未定です。

今は沖田さんがいいなあと思っっているんですが、どうなるかは本当に分かりません。

第七話〜楽しい？お買い物〜（前書き）

今回は短いです。

あと、ギャグもほとんどありません。

第七話〜楽しい？お買い物〜

「紫苑 side」

『「ここが京・・・初めて見たわあ」』

総「紫苑ちゃん。それ、当たり前だから」

『それもそっか』

総「はぐれたりしないですよ？」

『子供じゃねえから大丈夫！！』

総「そっか」

そう言っつて、沖田さんは私の手を握り、引っ張っていった

少し歩けば、目的地である呉服屋にたどり着いた

「何かお探しですか？」

店に入ると、店員の方が沖田さんに話しかけに行った

そして、なにやら二人でここそ話している

少し待っても終わりそうになかったので、私は店の中をぐるぐるし始めた

『へえー・・・どれも綺麗だねえ』

見ていると、綺麗な桜模様の着物を見つけた

『うわ・・・すごい』

「さ、お客さん！こっちに来て下さい！！」

『え、ちょいまちー！』

店員さんに私はずると引きずられていった
沖田さんを横切ったとき、彼は笑っていた
真っ黒な笑みで・・・

「えっと・・・左袖は切っておけばいいんですよ？」

『はい・・・お願いします』

「はい、この二着はどうですか？」

店員さんは、二つの着物を見せてくれた

一つは薄紫の着物で、大きな赤い華の模様がある着物
もう一つは、黒色で紅い紅葉の模様のある着物だった

「どうですか？あの男の方が選んだのですが・・・」

『沖田さんが!?!』

以外だった

センスいいな・・・あの人

「それと、これは試着してくれと・・・」

『!?!これ・・・”紫苑”の、華?』

店員さんが持ってきてくれた着物・・・
それには、私の名前と同じ”紫苑”の華が描かれていた
黒地に紫の紫苑の華がとても綺麗だった

「早速試着しますか?」

『は、はい!』

― 総司 side ―

呉服やに来て、僕が店員さんと話していると、紫苑ちゃんはほかの

着物を見に行つた

だから、僕から一着紫苑ちゃんに贈り物をしようと思つたんだ

総「紫苑の華”の模様がある着物は、試着してもいいですか？」

向こうの人はニッコリ笑つて、了承してくれた

総「きつと似合つてるよね」

「お待たせしましたあー！」

しばらくすると、さっきの店員さんが紫苑ちゃんを連れてきてくれた

『沖田さん・・・変じゃ、ないよね？』

総「う、うん・・・似合ってるよ」

すごく似合ってる

思っていた以上に似合ってる

しばらく、僕は何も言えなかった

―紫苑 side―

『沖田さん、今日は本当にありがとうございました!』

総「はあ・・・僕との約束、もう忘れたの?」

『あつ、ごめん・・・』

総「ま、今日は良いものを見せてもらったからね・・・許してあげる」

『そういえば、私の名前がよく華の名前だって分かったわけ?』

ずっとそれが気になっていた

紫苑なんて華、知っている人は少ない

総「土方さんの”俳句”に書いてあったんだよ」

『土方さんの・・・俳句!?!』

総「あれ、知らないの?」

『この世界に来てからほとんど動けなかった私知ってるわけないでしょ・・・』

総「それもそうだね」

『で・・・どんなことを書いてるわけ?』

総「今度一緒に書き写しに行こつか。」豊玉発句集”って名前なんだ」

『ぜひお供させて下さい!?!』

I 総司 side I

今日の買い物は楽しかった
紫苑ちゃんのあの姿は、まだ僕しか知らないって思うとかなりうれしいね

ねえ紫苑ちゃん
紫苑の花言葉って知ってる？

”君を忘れない”

僕は君を忘れない
だから、君も忘れないでね

君は、いついなくなるか分からないから……

第八話 痛み

―紫苑 side―

今日買ってもらった着物は明日から着ることにした

早く明日にならないかなあと思っているのは、特に沖田さんには内緒
屯所へ帰るまでの道のりで、何度も敬語で話しそうになった
やっぱ、同じ沖田でも雰囲気が違うんだよね

あつちの沖田は童顔だけど・・・こつちの沖田は男前なんだよ！！
思わず敬語になってしまう

んで、所変わってここは千鶴ちゃんの部屋

夕餉のまで時間があつたので、一人寂しく監視されている千鶴ちゃんに会いに来た

『千鶴ちゃん・・・斉藤さんに何かされたりしなかった？』

千「大丈夫だよ・・・紫苑さん、心配しすぎですよ」

『そういえば、斉藤さん！土方さんってあとどれくらいで帰ってきますか？』

―「一週間もすれば、帰ってくるはずだ・・・」

『のんびり出来るのもあと一週間か・・・チッ』

千「もう傷の方は大丈夫なんですか？」

『うん！ただ、まだ傷口は完全に塞がってはいないかな』

平「おーい！飯の時間だぜ？」

『分かった！千鶴ちゃん、早く行こー！』

私は千鶴ちゃんの手を引っ張って、広間まで走っていった

平「一君？どうかしたのか？」

「いや・・・何でもない」

スッパーーーン

思い切り襖を開けると、全員座っていた
もちろん、一君や平助はいないけどね

永「遅せえよ！俺のこの腹の高鳴り、どうしてくれるー！！」

『永倉さん、それ毎日言ってるじゃない？』

原「まあ、新八だからな・・・」

総「紫苑ちゃんの席はここだよ」

永「千鶴ちゃんは左之の隣だぜ」

千「は、はい」

総「紫苑ちゃんも早く」

『ん、ごめん』

私と千鶴が座り、食事を始めた

早速、永倉さんと平助はおかずの取り合いを始めている

ちなみに、私も平助達と座っているときは一緒に参加していたりする

原「毎回毎回こんなんだ・・・騒がしくてすまないな」

千「い・・・いえ」

おお・・・千鶴ちゃんが笑ったところ、久しぶりに見たよ

この前、羅刹をまた見ちゃったからすごくずっと緊張状態だったからな

井「みんな、ちょっといいかい？大阪にいる土方さんから知らせが届いたんだが・・・山南さんが隊務中に深手を負ったらしい」

『なっ！！』

井上さんの一言で、空気が変わる

井「詳しいことは判らないが、斬られたのは左腕とのことだ・・・命に別状はないらしい」

千「よかった・・・」

平「良くねえよ！」

千「え？」

『千鶴ちゃん、刀は片手で容易に扱ふことは出来ないんだよ・・・小太刀でも、それは同じでしょ？』

千「あっ・・・」

一「最悪、山南さんは二度と真剣を振るえまい」

『そつだね』

井「・・・それじゃ私は近藤さんと話があるから」

そう言つて、井上さんは部屋から出ていった

左腕、ね・・・

傷が深ければ、真剣を振るうことは困難だ

『またか・・・振るえなくなる奴を見るのは』

—「また？」

総「紫苑ちゃん？」

『えっ？私・・・何か言つた？』

—「総」「ああ／＼うん」「

『何か・・・変なこと言つた？』

総「変じゃないけど・・・ね、一君？」

—「ああ・・・あなたは、山南さんの様な傷を負つた者達を見たことがあるみたいだな」

『だつて、戦争に参加してたからね』

・・・あれ？

私、何かまずい事でも言った!?

誰かぁー！くしゃみでも良いから返事してくれえー！！

原「おい・・・戦争に参加したことがあるって、本当か？」

『おお、原田さん！やっと答えてくれたよ！！』

永「で、本当なのか？」

『あれ・・・私、話していなかった？』

全『うん』

『うそおー！！』

もう嫌だ・・・視線が痛いよ・・・

総「紫苑ちゃん？（黒）」

『はいはい・・・そんな事しなくてもちゃんと話しますから』

あーあ

面倒事増やしちゃったよ・・・

しかも自分で・・・

第八話〜痛み〜（後書き）

銀魂メンバーはとりあえず池田屋の後に出發します！！
もう少しお待ちください・・・

今回は、銀さん達が活躍した攘夷戦争についてが前半で、土方さん達が帰ってくるところが後半の予定です。

次回もお楽しみに。

第九話↳過去、そして帰還↳（前書き）

またまた台詞ばかりです。

読みにくいと思います・・・

本当にすみません・・・

誰か、私に文才を分けてくれ！！

第九話　過去、そして帰還

―紫苑 side―

『はあ……』

総「ため息つきたいのはこっちなんだけど？」

『まあ……別に知らなくても良いかなーって思ったから話さなかつただけだよ』

総「それは僕達自身で決めるから、そんな気遣いはいらないよ？」

『じゃ、話しますよ？攘夷戦争っていうのは、一言で言えば

化け物と人との戦争です』

平「それってさ、前に言ってた”天人”の事？」

『そうだよ。ポチのくせによく覚えてたね』

平「だから平助……!」

総「二人共・・・うるさいよ？紫苑ちゃんは続きを早く話してくれない？（黒）」

怖っ！！

そんな真っ黒な笑みを向けるなよ！！

『えっと・・・その戦争は約二十年前ぐらいにあって、銀時達と一緒に参加したんだよ』

原「銀時？誰だそいつは？」

『天然パーマで死んだ魚のような目をしているマダオです』

永「その”まだお”って何だ？」

『まるで、ダメな、おっさん・・・略して、マダオです』

総「そんな人が戦争に参加してる時点で、負けは確定じゃない？」

『あー・・・負けは最初から分かってたんですよね』

「負けが、分かっていたのか？」

『だって、向こうはばかでかい大砲使ったり、空から一方的に攻撃できて、私達は基本刀だけですよ？負けるのは最初から分かったんですよ』

永「分かっていたが、戦争に参加したんだな」

『ま、一つの敵討ちですね』

総「敵討ち？」

『この戦争で、私達の先生は死んだ・・・その時から、私達は違う道を歩みだした・・・』

総「そつか・・・紫苑ちゃん、もう僕達に話していない事とかない？」

『たぶんね』

原「なら、さっさと飯食おうぜ。もう冷めちまってる」

永「おう、そうだな！」

『永倉さん、たくあんは貰います！』

永「なっ！！！」

食事を再開するとき、先ほどの緊張した空気はなかった
ただ、この場にいる誰もが山南さんを気にしている雰囲気は感じて
いた

台所に私はいる

何故かと言つと・・・

今日は私が炊事当番の日だからだ！！
しかも、初めての

隣では、斉藤さんと沖田さんが慣れた手付きで料理を作っている

総「おはよう、千鶴ちゃん」

千「おはようございます。あの・・・沖田さんや斉藤さんが食事の支度をしているんですか？」

一「別に俺達だけではない」

『食事の支度は持ち回りなんだってさ』

千「紫苑さん！紫苑さんも食事の支度をしていたんですね」

『まあね』

平「おーい！そろそろ土方さん達帰ってくるんじゃないかって」

何！？

土方さんが帰ってくるだ！？

『嫌だあ————!!』

歳「うるせえ!!少しは静かにしやがれ!!」

総「何だ、土方さんもう帰ってきてたんですか」

歳「それより・・・何でおまえがここに居る」

『ああ?今日は私が炊事当番ですが、文句でもあるんですか?』

歳「お前じゃねえよ・・・千鶴だったか?誰が部屋を出て良いと言った?」

千「あ、あの・・・」

平「俺が言ったんだ!飯だって今みんなと一緒に食ってるし・・・」

歳「勝手なことを・・・」

総「そんなに心配なら土方さんがつきつきりで監視したらいいじゃないですか」

どうしよう・・・

沖田さんに加勢しようかな?

「お疲れさまです、副長。それより山南さんの傷の具合はどうですか？」

歳「……まだなんとも言えんが、この旅路中食事もろくにしていねえ状態だ」

うわっ、眉間のしわすごっ!!

ハゲまで一直線だ!!

歳「誰がハゲだ!!!」

『何言ってるんですか？確かに心の中では思いましたけど……』

歳「普通に口に出てたぞ？」

『……てへ』

歳「てめえ……ふざけてんのか？」

『で、山南さん。ずっと食事を取ってないんですけど？』

歳「ああ」

千「あの、山南さんのお食事・・・私にお世話させてもらえないでしょうか？父様のそばで怪我人の看病もしていましたし・・・」

歳「やめておけ。下手な気遣いはかえって山南さんを意固地にさせるだけだ」

総「いいんじゃないですか？働かざるもの食うべからずですよ」

平「食わねえと山南さんぶったおれちまうって！」

『なら、私も一緒に行くよ。こんな時の対応は私が一番慣れているだろうし・・・』

歳「慣れているだと？」

土方さん、睨みつけてきやがった
でも、本当なんだからね！

私悪くないし、嘘も言っていないからね！！

『それに、山南さんに渡したい物があるんですよ。慣れているって事については沖田さんとか、まあ幹部の人達に聞いて下さいな』

歳「はあ・・・勝手にしろ」

そして、土方さんは自室に戻っていった

千「土方さん・・・山南さんの事が心配じゃないんでしょうか？」

一「逆だ」

『・・・だろうね。むしろ、一番気にかけてるでしょうね』

一「ああ。自分が一緒に居ながら山南さんに怪我を負わせてしまったこと・・・悔やまぬわけはあるまい」

千「・・・・・・・・」

『千鶴ちゃん！とりあえず、持っていこうか？』

千「失礼します。お食事を持ってきました」

『山南さーん！ちゃんと食べてよ？私が心を込めて作ったんだから』！

山「ありがとうございます。まさか雪村君と紫苑さんが持ってくるなんて……!」

千「お味噌汁の具は細かく刻んだり擦ってあります。ですからお椀から直接飲んでみて下さい」

山「これは……同情ですか？」

やっぱりそうなるよな……

山「左手を使えない私が無様にこぼしながら食べなくて済むようにですか？」

千「いえ、そんな……」

山「いかにも私のためを思っているようですが……」

結局あなたは、自分の居場所を作りたいだけなのではありませんか？

千「・・・出すぎた真似をしてすみませんでした。でも、少しでもいいから食べて下さい・・・皆さん心配してるんです」

ちらつと千鶴ちゃんが私を見てきた

『千鶴ちゃん、先に戻ってて。ご飯は先に食べてて良いって、みんなにも伝えておいてね』

小声で千鶴ちゃんにそう言った

千「・・・失礼します」

そして、千鶴ちゃんは先に部屋から出ていった

山「・・・少し言い過ぎましたかね？」

『そんなことないですよ』

山「・・・それで、用は何ですか？」

『これ・・・よかったら使ってください』

私は小さな入れ物を山南さんに渡した

山「これは？」

『一族秘伝？の塗り薬です。普通の薬よりかは効きますよ？』

山「どうして私にこれを？」

『戦争中、何人もの人達が山南さんと同じように怪我を負った。私はその人達にいつもその塗り薬を渡していたんですよ』

山「あなたは・・・戦争に参加したことがあるのですか？」

『はい。神経まで傷を負ったのなら回復は難しい・・・でも、そこまでの傷でなければその薬が回復するのを手伝ってくれるはずですよ。よかったら、使って下さいね？』

山「ありがとうございます」

『折角だし、食事もみんなとしませんか？』

山「そうですね・・・」

山南さんはゆっくり立ち上がり、先ほど千鶴ちゃんと持ってきた料

理を持った

私は部屋の襖の開け閉めだけして、山南さんと一緒にみんなのいる
広間へ向かっていった

第十話 お披露目会！?? (前書き)

今回は戦闘が中心です。

よくわからない所とかかなりあると思います。

第十話 お披露目会！???

「紫苑 side」

ついにこの日が来てしまった
本当に来てしまった

『沖田さん、私のほっぺたつねってもらえます?』

総「じじ?」

『いだだだだっ!ギブ!ギブアップ!負けました!!!』

はあ・・・やっぱり、夢じゃないか

さつきから隊士の皆さんの視線が痛いよ・・・
殺気まじりの視線もあるし・・・

『はあ・・・』

総「紫苑ちゃん、ため息をつくたびに幸せが一つずつ逃げていくらしいよ?」

『ため息をするなど?無理ですね。こんな大勢の前で、しかも幹部

達全員と対戦なんて・・・嫌だ』

総「そうはつきり言われると僕でも傷つくなあ〜」

『勝手にそうしておけばいいよ・・・』

本当に嫌だ

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ・・・

歳「おい、準備はいいか？」

『あー、本当にこの人数の前で、しかも幹部達と一対一で試合するんですか？』

歳「ああ。何か問題でもあるのか？」

『面倒なんで、”幹部全員対私”にしませんか？』

歳「はあ！？お前、今なんて言ったか分かってんのか！？」

『分かってますよ？』

今の私の発言で、隊士の皆さんからの視線はもっと痛くなった
殺気を含めた視線も増えた

総「あはははははっ！さすが紫苑ちゃん！！」

沖田さんの笑い声のおかげで、一瞬だけ視線から解放された
本当、一瞬だけなんだけどね・・・

歳「笑い事じゃねえぞ、総司！！」

総「いいじゃないですか、土方さん。本人が言い出したんですから」

歳「・・・本当にやるのか？」

『はい。ただ、一つだけいいですか？』

歳「何だ？」

『まず、土方さんも絶対参加。で、原田さんには刀じゃなくて得意な槍でやってもらいたいですけど』

歳「俺も？しかも、原田に槍を使わせるのか？」

『ただ、槍は木刀で防ぎきる自信がないので、鉄扇を使わせてくれるとうれしいですね』

歳「お前等、今の聞いたか？」

土方さんは少し離れた所にいる幹部達に聞く

原「別にいいけどよ・・・怪我しても知らないぞ？」

『だから、それを防ぐための鉄扇ですよ』

—「俺は副長の指示に従います」

総「僕も紫苑ちゃんと戦えるなら別にいいですよ」

平「紫苑！本当に良いのか？幹部達全員相手するのに、木刀と鉄扇だけでさ」

永「平助の言うとおりだ！」

『お二人とも・・・私の心配より、自分の心配をした方が良いと思いますよ？』

歳「・・・分かった。お望み通り幹部全員で相手してやる。原田は槍を取ってこい」

原「わ、分かった」

『近藤さん、この刀と小刀持っていてくれませんか？』

勇「分かった。任せてくれ」

歳「ほれ、お前のやつだ」

土方さんが木刀を持ってきてくれた

・・・折れたりしないかな？

もし折れたら・・・誰かの盗もう

勇「皆、並んでくれ」

近藤さんの言葉で各自自分の場所につく

その時、原田さんがちゃんと槍を持っているのを見て、少し安心した

勇「それでは・・・始めっ！！！！」

近藤さんの一声で、試合は始まった

私は右手に木刀を持ち、左手に鉄扇を持ち、戦闘体制を取った
始まったと同時に構え、一拍ぐらい後に沖田さんと斉藤さんが突っ
込んできた

沖田さんは右側、斉藤さんは左側にいるため、一つ一つの攻撃の間
の隙が全くない

『だけど、まだまだ!!!』

私は木刀と鉄扇を使って二人の攻撃を防ぎ、大きく後ろに下がった
そして、後ろには原田さんがいて、槍特有の鋭い突きが来る
それを鉄扇で紙一重で軌道をそらし、原田さんの背にまわる
腰の辺りを蹴り、原田さんと距離を取る

平「だらあっ!!!」

すかさず次の攻撃が来るが、相手が平助だったので、木刀で押し返す

永「もらったあ!!!」

『なっ!!!』

平助の次に永倉さんの重い一撃が来る

鉄扇で受けたため、かなり押されてしまっている

『ちっ!!!』

少し後ろに跳んで距離を取る

すぐに二撃目が来たが、今度は木刀で受けたので押されることはなかった

永「俺の一撃をよく簡単に防げるな」

『いや、一撃目はしんどかったですよ?』

後ろから沖田さんと斉藤さんの気配がしたので、永倉さんを少し押し、上へ跳んで二人の攻撃を避けた

総「やっぱり、強いね!」

—「今のは幹部達で真似できる技ではないな」

永「いや、誰も出来ねえだろ。俺を跳び越えたんだぜ?」

そう、私は永倉さんを飛び越したのだ

これは桜月華だからこそ出来る技だ

ガンッ

歳「何だ、十分俺ら相手に出来るじゃねえか」

『出来ないなら最初から言いませんよ!』

土方さんと同時に後ろに離れ、すぐに相手の懐めがけて一気に距離を詰め、

斬る!!

歳「ちっ!!」

『土方さん、甘いですねえ』

平「嘘だろ・・・」

原「土方さんに、一撃入れやがった」

歳「もう終わりか・・・」

そう言いながら、土方さんは近藤さんの所に行った

ちなみに、この試合のルールは

- ・幹部達は私に一撃入れられたら退場
 - ・幹部が最後一人になったら、どちらかが戦闘不能になるまで戦う
- この二つだ

『さて、次は誰を退場させようかな?』

原「随分余裕だな」

『来ると思っていましたよ?』

原田さんの槍を避け、木刀の方で一撃入れようとするが、槍で防がれ、一度距離を取る
すると、沖田さんと斉藤さんのペアがやってくる

『あーやばいかも!』

総「負け・・・認めちゃえば?」

『断る!』

—「終わりだ!」

『それは斉藤さんの方かな?』

バキッ

—「なっ!!」

原「無茶苦茶だな、おい・・・」

状況説明

さっきの一撃で、私は斉藤さんの木刀をへし折り、一撃入れたのだ！
もちろん、私の木刀は折れてないけどね

『さあ、次は誰だ?』

永「俺だ!!!」

今度は永倉さんが大きく振りかざしてきた
とっさに防御したら、今度は私の木刀が・・・

バキッ

『私の木刀—————!!』

わお、折られちゃったよ
っーか、折れちゃったよ……

永「どうする？降参するか？」

『ふふふふっ……私がそんな事するわけないでしょ？（黒）』

永「えっ!?!」

永倉さんが驚いた一瞬のうちに、永倉さんの木刀をいただいた

『どーも』

永「何で木刀が……って、それ俺の木刀!!」

『さんねんでしたー!!』

私は容赦なしに丸腰の永倉さんに一撃入れた

永「やられたー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そして、永倉さんの叫び声が響いた

原「平助、総司！ー！」

平「おう！ー！」

総「これはちよつとまずいかな？」

『あと三人か・・・負けんぞー！』

原「おらっ！ー！」

また槍の突きが来る

それを鉄扇を使ってうまくよける

すると、今度は沖田さんと平助が同時に突っ込んでくる

平「どうだっ！ー！」

総「少しは追いつめられたかな？」

原「二人とも、そのままにいる!!」

『うげっ!!』

今は両手がふさがっている状態

この状態から原田さんの槍を避ける自信がない・・・

『しょうがないか・・・』

総・平「？」

原「これで決める!!」

原田さんの槍は私に当たったかのように見えた
だが、原田さんが突いたのは・・・

原「て、鉄扇!？」

平「紫苑は!？」

総「平助!!！」

『もーらい』

私は桜月華の力を少しだけ使い、二人から抜け出して、平助に一撃入れた

原「総司、ちょっとやばくないか？」

総「あーあ。こんなに強いなら真剣でやりたかったな」

『もらったあ!!！」』

平助に続いて、今度は原田さんに一撃入れる

原「負けだ負け。お前本当に強いよ」

『それはどーも』

懐にある鉄扇は取り出さず、両手でしっかりと木刀を握る

総「あとは、僕だけか・・・」

『すんなり負けを認めて下さいよ』

総「それは出来ない、ね!!!!」

同時に踏み込み、お互いの一撃がぶつかった

『悪いけど、私負けず嫌いなんですよ』

総「そうみたいだね」

沖田さんの手にある木刀
それは刀身の半分より上がなかった

勇「勝者、紫苑君！！！！」

そして、近藤さんの一言で試合は終わった
それと同時に、周りからは歓喜が起こった

第十一話 今度は新選組として (前書き)

お待たせしました！
今回は短いです。

第十一話 今度は新選組として

―紫苑 side―

幹部の人達との地獄の様な試合の後・・・私はさらに地獄を見た

『誰かあゝ!!!ヘルプミー!助けてろ!!!!!!』

私今・・・隊士の皆さんに囲まれています

やばいよ!

緊張しすぎて倒れそうだよ

私、こう見えてもあがり症なんだよ!

ここ重要だよ!?

幹部の人達なんか・・・

総「紫苑ちゃん、人気だね? (黒)」

永「いやあ、まさかあそこまで隊士が紫苑を質問責めをするとは思わなかったな」

「さっきの試合を見れば、誰でも聞きたいことはあると思うが・・・」

平「だよなー！紫苑すごい強いしさー！」

原「俺達は、女に負けちまったがな・・・」

全『はあ〜・・・』

『ちよつとそこお！！ため息つく前に助けて！！』

千「紫苑さん、大丈夫ですか？」

『今日はもう無理・・・おかず戦争に参加する気力の”き”の字もない・・・』

そう！

私はあれから一時間ほど隊士達の質問責めをされていた
ほとんど真面目に答えた記憶がない

土方さんが言うには、隊士から信頼が得られたから安心していいらしい

・・・しかし、一体何を安心すればいいのだろうか？

永「紫苑ちゃん、どこの組にいくんだろうなー」

総「もちろん僕の所に決まってるでしょ？」

原「いや、もしかしたら俺の組かもしれねえぜ？」

平「いやいや・・・俺の組だって！」

ー「いや、きつと俺の組だ・・・／／／」

斉藤さん・・・可愛い!!

私、三番組がいいなあ

もちろん、一番沖田さんの組にはいきたくない!

理由は・・・言わなくても分かるよね？

歳「紫苑！お前の組が決まったぞ！」

総「何で夜だけなんです？夜の方が危険なのに」

歳「こいつは男装させるわけにはいかねえだろ？だったら、昼間は駄目だ」

原「まあ、新選組にしかも隊士として女がいると世間に知られたら・・・いろいろと面倒だな」

歳「で、昼間は隊士達の稽古につき合ってくれねえか？」

『と、言いますと？』

歳「はつきり言って、幹部の実力と隊士達の実力の差が大きい・・・だから、お前には一対一に近い状態で稽古してほしい」

平「それいいな!!」

『それはいいですけど・・・私我流なんですけど』

歳「別に気にしなくてもいい」

『りょーかい』

本当に大丈夫なのだろうか・・・

歳「あと、隊服を用意したから後で俺の部屋に取りに来い」

『ありがとうございます』

これから、私は”新選組”として戦っていくのか・・・

体、やっぱり鈍ってたし・・・

歳「ま、これからよろしくな」

『プツ。何普段絶対に言わないような事言ってるんですか？酔ってるんですか？』

歳「てめえ・・・」

総「紫苑ちゃんの言う通りですよ、土方さん」

『「じつじつ事に関しては、すごく相性が良いですよね？私と沖田さん』

総「そうだね」

歳「そういう所で相性を良くするな！俺の身にもなってみやがれ
！……！」

第十二話　稽古、そして討ち入り

―紫苑 side―

永「ここが道場だぜ。これからよろしく頼むぜ？」

『うん・・・頑張ってみます』

今日から私は新選組一番組の隊士として働くことになった
隊服は昨日貰っていて、あの浅葱色の羽織がすごく印象的だった

そして、今日は永倉さんの組の人達と稽古をする事になった

もちろん、他の組の人達や幹部の人達もいる

早速道場に永倉さんと一緒に入ると、永倉さんに隊士の皆さんが挨拶をしていた

そのまま私も入っていくと、私も隊士の皆さんに永倉さんと同じ様に挨拶された

『お・・・おはようございます・・・』

もちろん、こんな感じのあいさつしか返せなかった
だってみんなが私を見てるんだよ！？無理だよ・・・

永「で、俺は何をすればいい？」

『とりあえず……いつも通りやって下さい』

永「そつか……お前等！いつも通り始めるぞ！」

隊士『はい！！！！！！』

永倉さんが指示を出すと、一斉に素振りを始めた

『けっこう真面目にやるんだ……ちよつと意外』

私達が先生に教えて貰ってた頃なんて、こんなに真面目にやってな
かったな……

特に銀時と私はw

ツラは真面目な方が……

今ごろ、銀時達何してるのかな？
真選組にも迷惑かけて……ないか
いつもまともに働いてなかったし

少し、寂しいね……

総「どうしたの？そんな所で」

『お、沖田さん！』

総「何か”沖田さん”ってのも堅苦しいよね、同じ組だしさ・・・折角だから”総司”って呼んで？平助の事は”平助”って呼んでるし」

『それは・・・たぶん無理！！』

総「ふーん・・・ま、敬語じゃないだけましか」

—「紫苑」

『はい・・・何ですか？』

—「その、だな・・・一つ俺と、手合わせ・・・してはもらえないだろうか」

『いいですよ。あ、木刀でいいですか？』

—「あゝ」

総「一君ずるいなー。紫苑ちゃん、一君の後僕も良い？」

『あー・・・斉藤さんの後は隊士の皆さんと試合をしようかなと思
つてたんだけど・・・』

総「じゃ、その後で良いよ」

『いや、時間かかるから・・・斉藤さんの後、やろっ』

総「そう、ありがとう」

ー斉藤 side ー

紫苑に手合わせを頼んだらすぐに了承してくれた

あの時は俺の木刀が折られてしまったから、すぐに終わってしまった
あの時は本当に・・・

悔しかった

あんな負け方は俺は嫌だ

今日は、悔いの残らぬようにせねば・・・

永「それじゃ、二人共・・・準備は良いか？」

一「ああ」

『はい!』

永「それでは・・・始め!!」

新八の合図と同時に、紫苑は俺に一撃入れてきた

一瞬で距離を詰められ、はっきり言って見えなかった

気配や空気の流れ、そして感で一撃を何とか防ぐことが出来た
だが、その一撃は女とは思えないくらい重い

一「ぐっ・・・」

『斉藤さん・・・今回も、勝ちが貰えますよ?』

一「いや、今日は俺が貰う!」

少し軌道をずらし、ほんの一瞬だけの隙を作る

その一瞬の間に、一撃入れようとした

カアアアアアン・・・

—「なっ!!!」

『ふうー。危ない危ない・・・間一髪だね』

紫苑は木刀の柄で俺の攻撃を防いだ
その時、俺は思わず紫苑の姿に見とれてしまった
女とは思えない素早さや力・・・

『もらったああああ!!!!』

紫苑

あんたは、強くて美しい・・・
まるで、刀の様だ・・・

「紫苑 side」

『おはよう、ございます……』

朝食を食べるため、私は沖田さん・斉藤さん・永倉さんの三人と一緒に広間に入った

歳「……何があつた」

総「何もありませんよ？」

歳「いつも飯の時は特にうるさい紫苑が、今日は静かなんだぞ？何もないわけねえだろうが！！」

総「本当に何もありません。ただ、試合をしただけですよ」

永「紫苑。とりあえず座ろつぜ？」

『はい……』

なぜ私がこんなにも静かなのかというと、それはさっきの稽古のせいなんです

はつきり言います……

疲れました

あその後、斉藤さんとの試合が終わったと同時に沖田さんとの試合が始まりました

今回、沖田さんマジで強かった・・・

沖田さんは突きの一撃が速く、重くて、避けるだけで精一杯でしたでも、それだけで終わらないのが沖田さん
いろいろな攻撃を繰り返し、お腹がすき始めた私はどんどん体力が無くなっていきました
で、最後は私の体力切れで負けました

歳「おい紫苑。本当に大丈夫なのか？」

『はい。それより、早く食べませんか？死にそうです・・・』

歳「そうだな」

そして、やっと私の祝福の時がやってきた

『千鶴ちゃん、出かけるの？』

千「はい。沖田さん達の組の皆さんの巡察に同行させてもらおうんです」

『そっか。お父さんの情報、何かあればいいね』

総「千鶴ちゃん、そろそろ行くよ？」

千「はい！それじゃ、行ってきます」

『行ってらっしゃい』

私は千鶴ちゃんと一番組のみんなを送り出した

沖田さんは手を振りながら出ていったので、私も振り返しておいた

斉藤さんから聞いたのだが、千鶴ちゃんの剣の腕を斉藤さんが見た
そうだ

巡察に同行させても特に大丈夫な腕だから、今回巡察についていく
ことになったらしい

『そういえば、千鶴ちゃんが外に出るのって……かなり久しぶり
だよな？』

原「お、紫苑じゃねえか。どうしたんだ？」

『あ、原田さん』

永「あと、俺と平助もいるぜ？」

平「こんな所で何してんだ？」

『何もしてない』

平「そ、そっか・・・」

『原田さん。京に良い”鍛冶屋”ってありますか？』

原「鍛冶屋なら斉藤に聞いた方がいいぞ？」

永「あいつ、刀一筋だからな」

原「でも、一体鍛冶屋なんかは何の用なんだ？お前の刀でも折れたのか？」

『違う違う、これを見て貰おうと思ってね』

私は懐から隠し持っている鉄扇を取り出す

それは、前に幹部達との試合で使ったもので、中心に穴があいていた

原「これって・・・この前使ったやつか？」

『うん。これの代わりに新しいのは作ったんだけど、ちゃんと斬れるかどうか、折れたりしないかどうかを見てもらおうと思ってさ』

平「これ、紫苑が作ってんのか!？」

『そうだよ。かなり上手いでしょ？知り合いの鍛冶屋の子に教えてもらった、オリジナル鉄扇なんだ!』

永「おりじ、なる？なんだそりゃ」

『えーつと・・・独自のもの、かな』

原「手先が器用なんだ・・・この鉄扇もかなり上手く出来てるしな」

永「ここが刃になってるのか・・・だからあん時、”あいつ等”を斬れたんだな」

『私も斬られましたけどね・・・』

永「本当、悪かったって!」

『気にしてないから、いいですよ』

永倉さんは必死に謝ってくれる
ほかの二人も軽く謝ってくれた

原「その傷・・・痕は残りそうなのか？」

『たぶん』

全『はあー……』

勇「動ける隊士はこれだけか……」

昼の巡察の時、沖田さん達は長州の間者であつたある枳屋の主人を捕まえて帰つてきた

私は最初は”お手柄だな”と思つていた

しかし、新選組は間者だと知つた上で泳がせていたらしい

そして、土方さんは捕らえてきた古高を拷問し、あることを明かした

”風の強い日に京の町へ火を放ち、その機に乗じて天子様を長州に連れ出す”

これが長州の目的だそそうだ

監察の島田さんの話によると、会合を開くならこれまでの動きから見て”四国屋”か”池田屋”のどちらかだそうだし、そして今もなお、本命がどちらなのかはわかっていない

歳「・・・隊を二手に分ける」

結果、四国屋には

土方さん・斉藤さん・原田さん・井上さんを含む24名

池田屋には

近藤さん・沖田さん・永倉さん・平助を含む10名で出発していった

私は山南さん・千鶴ちゃんと一緒に待機することになった

山「紫苑さん。いつでも出れるよう、準備しておいてくださいね」

『はい・・・わかっています』

まさか、こんなにも早く隊服を着ることになるとは思ってもいなかった

山「動きを妨げてしまうようでしたら、わざわざ着る必要はないんですよ？」

『いや・・・昔もこんな感じで戦ったから、むしろ動きやすい』

山「それは心強いですね」

私は手に持っている刀を強く握りしめた

絶対に、今度は失わない！
必ず！！

そして、私達に舞い込んできた情報
それは・・・

本命は、”池田屋”

丞「すぐに土方副長のいる四国屋へ伝えに行きます」

山「雪村君、君も山崎君に同行してください」

千「え！？私、がですか？」

丞「お言葉ですが、伝令なら俺一人で・・・」

山「足止めをされた場合、一人より二人の方が確実です・・・行つてくれますね？」

千「はい！行きます！！」

山「そして紫苑さん・・・あなたには池田屋に行ってもらいます」

『わかった』

私は千鶴と山崎さんと別れ、急いで池田屋に向かった

山「局長達を、頼みましたよ」

出る直前、山南さんが言った言葉に一度彼の目を見て返事した

今は夜

人は見たところいない・・・

私は桜月華の血を使い、急いで池田屋に向かった
着いた時、既に戦闘は始まっていた
建物の中に入ると、鉄臭い匂いが充満していた

「おらっ！！」

私を見て、襲いかかってきた男を手に持っていた刀で斬る

そして、近藤さんの背を斬ろうとしていた者を斬る

勇「紫苑君!!」

『助太刀にきた。私はどいつを相手すればいい?』

永「上に行ってくれ!総司と平助がいる!!」

『わかった!』

目の前に迫っていた敵を斬り、二階へと続く階段を上っていった
上ると浪士達はすでに斬られていた
一歩進もうとすると、目の前の部屋の襖ごと平助が飛んできた

『平助!!』

血を流している平助の元に駆け寄ると、額の鉢金が二つに割れていた
すぐに応急処置をし、平助を安全な場所に運ぼうとすると

とても強い、昔何度も感じた”殺気”を感じた

『この殺気・・・人じゃない!!』

平助を寝かし、殺気を感じる方へ向かう

部屋の襖は既に開いていて、中を見ると沖田さんと金髪の男がいた

なんだ、こいつ・・・人じゃない!?

総「はあっ!!」

沖田さんは地面を蹴り、金髪の男に一撃入れようとした

しかし、その男は刀で簡単に攻撃を防ぐ

そのまま男は沖田さんの体勢を崩し、一撃入れようとする

キイイイン!!

?「何・・・」

『それ以上、やらせると思ってたのか?』

?「ふっ」

一撃を止めたのはいいが、男は一瞬で沖田さんの所に移動していた

『なっ！！』

総「っ！！」

男はそのまま沖田さんに蹴りを入れた
そして、沖田さんは壁まで飛ばされた

『総司——！！！！！！』

第十二話 稽古、そして討ち入り (後書き)

今更ですが、人物の表記について説明しておきます。

銀・・・銀時

楽・・・神楽

新・・・新八

近・・・近藤勲(真)

土・・・土方十四郎(真)

沖・・・沖田総悟(真)

勇・・・近藤勇(新)

歳・・・土方歳三(新)

総・・・沖田総司(新)

永・・・永倉新八(新)

一・・・斉藤一(新)

平・・・藤堂平助(新)

原・・・原田左之助(新)

山・・・山南敬助(新)

丞・・・山崎丞(新)

こんな感じです。

また増えたら書いていきます。

第十三話 長い夜の終わり (前書き)

お待たせしました！

今回は短いですが……
すみません……

第十三話 長い夜の終わり

―紫苑 side―

『総司――!!――!!』

? 「・・・その程度か」

『てめえ!!』

私は総司の前に立ち、男に刀を向けた
後ろでは、総司が咳込んでいるのが聞こえる
私はそのまま男に刀を向ける

？「ほう・・・俺とやりあつつもりか？」

『あんたの相手は、私がやる』

？「女のお前が、勝てるはずがなかるう」

その言葉を聞いたと同時に、私は男の背後に回り、背中を狙って斬った

だが、刀の先に男はいなかった

？「少しは出来るようだな」

後ろに振り返ると、男は傷一つないまま立っていた

『本気じゃなかったけど、避けられるとは思ってなかったよ・・・しかも、私の後ろをとるなんてね・・・』

？「この様なこと、お前にもたやすく出来るはずだ・・・」

『そうだね』

桜月華の血を使おうとすると、総司が止めた

『そう、じ？』

総「その力は使う必要はないよ」

？「やはり・・・お前は”人”ではないのだな」

『何故、そう思っ？』

？「簡単なことだ・・・」

俺は人ではないからな」

『天人・・・なのか？』

？「まあいい。お前達が踏み込んできた時点で俺の務めも終わっている」

男はそう言うと、外に出ていこうとする

？「いずれ・・・会うことになるだろう」

そして、一言私に対して言葉を残して行った

総「くそっ・・・僕は、僕はまだ・・・戦えるのに・・・」

ドサッ・・・

『・・・少し、休め。私が下まで運んでやる・・・』

傷が癒えるまで、そばにいてやるから・・・』

こうして、新選組の長い夜は終わった

―総司 side―

朝

僕は陽の光で目が覚めた

体を起こすと、昨日金髪の男に蹴られたところが痛んだ
そして、一人の存在に気づいた

総「紫苑、ちゃん？」

僕の布団の上で、彼女は寝ていた

総「体・・・冷えきってる」

『んあ・・・あれ？朝？』

総「おはよう、紫苑ちゃん」

『うわっ！沖田さん！？』

総「昨日は”総司”って呼んでくれたのに、今日は”沖田さん”なんだあ？（黒）」

『総司と呼ばせていただきます』

総「うん。それでいいよ」

昨日、あの男を逃がしたのは悔しいけど、紫苑ちゃんが名前で呼んでくれたのはうれしかったな

総「そういえば・・・紫苑ちゃん、ずっとここにいたの？」

『そうだけど・・・何か問題でも？』

総「ううん。何でもないよ」

『とりあえず、朝食持ってくるよ』

総「いや、僕も広間に行くよ」

『駄目！せめて、今日はゆっくり休んでよ！！昨日の疲れが残ってるんだからさ・・・』

総「そう？なら、お願いしようかな？」

『待っててよ！すぐに持ってくるからさ！...』

そう言つて、紫苑ちゃんは部屋から出ていった

―紫苑 s i d e ―

『斉藤さん！総司の朝食くださいー！！』

―「そこに置いてある。あんたの分も一緒にあるから持っていくと良い」

斉藤さんが示した方を見た

そこには、二人分の食事がお盆の上に置かれていた

『ありがとうございます』

―「それと、副長から”今日は二人共ゆっくり休め”と言っていた」

『私・・・今日巡察の日、なんですけど』

―「俺の組が代わりに行く。安心しろ」

『・・・迷惑かけます』

―「気にするな。同じ”仲間”であるっつ..」

『はい!』

私はもう一度お礼を言ってから、総司の部屋に向かった

総司の部屋に帰る途中、たまたま土方さんと出会った
土方さんは”今日はゆっくり休め”と言って、自分の部屋に戻って
いった

そのまま進むと今度は原田さんと永倉さんと会った
二人は平助の容態を見に行っていたらしい
私の応急処置のお陰で、出血量は少なかったそうだ

『総司ー、持ってきたよー』

総「ありがとう。紫苑ちゃんもここで食べるの?」

『駄目なのか?駄目なら自分の部屋に帰るけど・・・』

総「いや、一緒に食べよう?食事は大勢でした方が良いらしいしね
?」

『そっか』

二人『「いただきます」』

そして、私は総司と一緒に一日を過ごした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013ba/>

桜月華祿

2012年1月14日01時03分発行